

C. S. ルイスと竜の話

川 崎 佳代子

J. R. R. トルキーンは、ファンタジー論として定評のある「妖精物語について」の中で、竜はファンタジーのトレード・マークであると述べている。また、「ベオウルフ論」の中では、トルキーンは『ベオウルフ』という叙事詩における竜の重要性を強調すると共に、古来英雄は「竜退治者」(dragon-slayer)であることを指摘している。竜は想像上の動物であるにもかかわらず、神話や伝説および物語に登場する頻度は他の架空の動物に比べ桁違いに多い。ユニコーン、ペガサス、セントールなど、ギリシャ神話は想像上の動物を満載しているが、西方、東方両世界で最も注目されているのは竜であろう。

トルキーンが主催するコールビターの会で『ベオウルフ』やアイスランドサガを愛読したルイスは、竜に関してもまたトルキーンと好みを共有していた。「頭韻詩」(The Alliterative Metre)というエッセイの中で、次のような自作の頭韻詩を紹介している。

竜について話をしていた／トルキーンと私は
バークシャーのバーで／大きな労働者が
静かに坐って／パイプをふかしていた
夕刻ずっと／空っぽのマグごしに
目をキラキラさせて／私たちを見ていた
「わしは竜をみたんだぞ」／と彼は猛々しく言った。¹⁾

トルキーンもルイスもそれぞれの自作のフェアリー・テイルにおいて竜を登場させている。トルキーンは『ホビットの冒険』、『農夫ジャイルズ』、『トム・ボンバディルの冒険』などにおいてである。一方ルイスは、『天路退行』、『ペレランドラ』、『朝びらき丸 東の海へ』および『銀のいす』で竜を登場させている。この小論では、ルイスがそれぞれの物語の中で竜をどのようにとらえ、それが竜の系譜上どのような位置にあるのかみてみることにする。そのために先ず簡単に竜

についての概念を一瞥する。

東方の竜の代表は、中国の竜(ロン)とインドのナーガである。中国では、昔から竜、麒麟、鳳凰、亀を四大霊獣として珍重してきたが、水中に住み、時が来ると水から出て天に昇ることができるという点から、地上と超越的な世界を結ぶ霊性のあるとされる竜は皇帝の力と結びついて、聖性化され、天子の象徴とされてきた。荒俣宏氏によると、竜とは、風水に語られる龍脈など、「生命の気の威力を具体化させた〈観念図像〉」であるという。イメージとしては、〈翼のあるワニ〉である。日本の竜は中国を経由して入ってきたと思われるが、ヘビと同一視もされ、特に水や水神と考えられ、雨乞いの対象になった。隣国の韓国も同様で、海や川などの治水、および雨をもたらす竜神として信仰していた。

一方、インドのナーガは、ヒンドゥー教の神の名で、「竜」と漢訳された。中国の竜のような、鱗におおわれ、角が2本、ひげがあり、鋭い爪を持つ4本足の動物ではなく、あくまでコブラの神である。古代のインドでは、水と豊穡の神、または生殖の神として敬愛されていたらしい。カンボジアなど他の東南アジアの諸国でもナーガを神とする民間信仰は残っているという。また、仏陀の前世がナーガの王族だったという伝説から、ナーガは敬愛されている。しかし、アーリア人の神話である『リグ・ベータ』(1500～900BC)では、ブリトラ(またはアヒ)という悪竜が出てくる。これは邪神であり、主神インドラに敵対するものとみられた。水をせき止めるブリトラをインドラが退治する。彼の武勲が『リブ・ベータ』で語られている。また、ガンジス河に棲む五頭の竜カーリアは、クリシュナに退治される竜である。いずれも竜・ヘビは水と関係が深く、雨乞いの対象である。

西方の竜の起源は、メソポタミア文明に遡るとされている。紀元前4000年頃には既に、シュメール人の印章に竜の形象が見いだされる。大ヘビの胴体に角と足があり、有翼のものもあり、ヨーロッパのドラゴンの原型と考えられている。シュメール人の竜も水と関係が深い。「エヌマ・エリシュ」というバビロニアの天地創造神話では、ティアマトという海水の女神が殺され、その遺体から天地が創造されたとなっている。ティアマトは竜の形をとっており、マルドゥクに殺されるのである。ティアマトが代表する竜は混沌を表し、竜が殺されて秩序が生まれるというプロセスを表すと解釈できるようである。

南へ下って、エジプトではどうかというと、インドのナーガとよく似たウラエウスというコブラの神が出てくる。これは聖蛇として王権のシンボルになってい

る。しかし、紀元前2400年頃になると、王権と結びつくラー（太陽神）に対立するものとして水に棲むヘビのアヘブが敵役になる点でも、竜・蛇は両義性を持つ。

ギリシャ神話にも竜はよく出てくる。ドラコーン (drakōn) と呼ばれ、英雄のイニシエーションというコンテキストで登場する。ヘスペリデスの島で、黄金のリングを守るラドンはヘルメスによって殺され、コルキスで黄金の羊皮を守る竜は、イアソンに裏をかかれて破れる。また、ゼウスに退治されるテュポーンや、アポロに敗れるピュトーンなど、英雄はドラコーンを退治することで英雄たりうるとされている。ドラコーンは空想の産物ではあるが、は虫類から連想され、ギリシャの先住民に信仰されていたヘビとの関係が深いといわれている。ドラコーンは本来蛇の意味を持ち、「睨みつける」(derkesthai) という語と近い。凝視行動のある蛇から派生したのかもしれない。「強大な獣の属性を完備し、地中の秘密ないし生産力を独占する竜は権力や豊穡の象徴である」とされ、黄金を守る竜は守護神的な要素を帯びており、必ずしもマイナスイメージのものではない。実際「古代ローマでは軍団が竜の旗を掲げ、西ヨーロッパ、とくにイギリスでは王家の紋章に用いられた。北ヨーロッパにおいても竜は海軍の象徴であり、バイキングは船の舳先に竜頭を飾った。」²⁾ アーサー王伝説では、アーサーの父はウーゼル・ペンドラゴンと呼ばれた。

J. キャンベルによると、蛇または竜を悪の象徴として固定したのは、ヨーロッパの文明に多大な影響を与えた聖書らしい。旧約聖書には数回水の上の竜としてレビアタンが登場する。神によって創造され、神によって退治される。例えば、イザヤ書27:1では、「蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される」と記されており、レビアタンは竜であり、蛇である。イスラエル人の約束の土地カナンに住む先住民の間にもロタンという竜がおり、バール神に対立するものと考えられているが、これはレビアタンと同一だと思われる。従って、メソポタミア、カナン、イスラエルなどでは竜は主権に敵対するものという概念があったようだ。新約聖書では、さらに進んで7つの頭を持つ「赤い竜」として登場し、神の敵対者サタンとして天使ミカエルに退治される。中世ヨーロッパのドラゴンはキリスト教の影響により、悪竜として登場し、聖者または信仰心厚い騎士に殺されるという役割を演じている。代表的な伝説が、聖ゲオルギウス (St. George) の竜退治である。もともとゲオルギウスはカッパドキア (トルコ) の出身であるが、聖ゲオルギウスの竜退治伝説として12世紀よりイングランドでもてはやされており、1222年オクスフォード教会会議の結果、聖ゲオルギウスはイギリスの保護聖人となった。

このように、西洋において竜は邪悪なもののシンボルとして定着した。

英雄伝説としては、ベオウルフやジークフリートの竜退治が有名である。ジークフリートが出てくる『ニーベルングの歌』の原典である、古代ゲルマンのジークルト伝説は、悪竜ファフニールから宝物を奪い返す物語となっている。ここでは宝物を守る竜というギリシャ神話のイメージが受け継がれている。アーサー王伝説でも竜退治のエピソードは繰り返されるが、ランスロットやトリストラムのエピソードに見られるように、竜の生け贄になろうとする王女を救い出す英雄というモチーフが見られる。心理学的にみると、「竜殺しは自我の発顕あるいは無意識から意識への移行—あるいは人間としての目覚めと同一視される。」³⁾ こういう考えは東洋には見られないようである。

東洋の竜も西洋のドラゴンもともに水に関係が深いが、ドラゴンが火を吐く点で、東洋の竜とは相違する。さらに、中世ヨーロッパの竜の息は毒を含んでいるという特徴を有している。おおざっぱに言って、東方の竜はプラス・イメージのものとして、畏敬の念をもって迎えられおり、西方の竜は、荒ぶるもの、邪悪なもののシンボルとして見られてきたが、いずれも恐ろしい力を有しているという点では共通である。善にしろ、悪にしろ想像上の動物である竜がこれほど世界中で注目されるのにはおそらく理由があるだろう。多くの天地創造神話には大体において竜または蛇がいるのも理由がありそうであるが、本稿の目的はそうした竜の存在理由についてあれこれ述べることではない。ここでは、もっぱらフェアリー・テイルにおける竜と、その伝統をルイスがどのように使っているか検討することにする。

民話にも竜はよく登場するが、伝説やロマンスにおける竜ほど宗教的な意味合いは強くない。例えば、ロジャー・ランズリー・グリーン編『竜の本』では、必ずしも悪い竜ばかりではなく、恩返しする竜であるとか、子どもにさえやつつけられるほど弱体化したドラゴンが登場する。ネズビットの『ドラゴン物語』は、力を失った竜が数多く登場する。とりわけ、「最後のドラゴン」では、王女が竜に襲われるところを王子が救出して結婚するというパターンが儀式化しており、当のドラゴンはその「やらせ」は願い下げで、むしろ王女の“dear”という呼びかけに涙し、喜んで従順なドラゴンになるという。これはケネス・グレアムの「ものぐさドラゴン」と同じ系列の物語である。この作品でも、ドラゴン少年の仲介で、退治しに来た聖ジョージ(聖ゲオルギウス)と折り合いをつけ、打ち合わせどおりに決闘をやってみせる。英雄伝説のパロディである。トルキーンの『農

夫ジャイルズ』に出てくるドラゴンも同じ系統の物語である。ロシナンテ風の馬は臆病であるし、北欧神話の猛犬ガームと同名の犬は駄犬である。そして、ラッパ銃をもった、アンチ・ヒーローのジャイルズに負けてしまうような竜が登場する。英雄の竜退治というパロディの中では、竜も権威を失ってしまう。その点『ホビットの冒険』に出てくるスマウグは宝物を守り、火を吐く恐ろしい伝統的な竜である。トルキーンの代表作である『指輪物語』の中ではドラゴンは登場しない。ドラゴンがフェアリー・テイルにおいては大きく注目されるキャラクターであるとする彼の持論に従えば、ドラゴンの登場によって、サウロンという敵役の存在が薄れる危険性があるからであろう。

アメリカのファンタジー作家アーシュラ・ルグインは『ゲド戦記』において竜を重要なキャラクターとして登場させている。竜の言語は、ゲドなど魔法使いが覚えなければならない古代語つまり、天地創造時の言語である。人間が創造される以前から存在し、小さな人間の知識を越えた叡智をもつ存在として描かれている。『壊れた腕輪』を除く3作に竜は登場するが、『最果ての島』と『帰還』に登場するカレシンという竜は原初的な存在である。宇宙神話をふまえた神に近い存在として位置づけられている。ルグインはドラゴンを、善悪を超越した存在として考えているようで、聖書が固定した竜のイメージ以前の姿に戻しているとも言えよう。ケネス・グレアムが言うとおり、「この世の邪悪なもの全てが、必ずしもドラゴンの中に封じ込まれているわけではない」のである。

次にC・S・ルイスの作品に登場する竜を検討してみることにする。

『天路退行』(The Pilgrim's Regress, 1933)

この物語では、主人公ジョンとその同道者ヴァーチャーがそれぞれの人生目標を確認した後、案内人に導かれて最終目的地に向かう。その道中で退治しなければならないものとしてドラゴンが登場する。ジョンは北のドラゴンと対決し、ヴァーチャーは南のドラゴンと対決する。この場面は以下の詩の形で描かれている。まず、ジョンが対決しなければならない「北の竜」は次のような独り言をつぶやく。

昔、森の中で竜の卵が殻を割り、
輝く体で躍り出ると、森が揺れた。

日の光が鱗に照り映え、露が
ひんやりした、甘い香りを放つ草と新芽におりていた。
わしはぶちのあるつれあいを求めた。愛し合い、
戯れ、山羊から滴り落ちる温かい乳を飲んだ。

今 わしは岩屋の中で宝を見張っている。
石ころだらけの土地にある、岩屋の中で、年取った哀れな竜の
わしは宝の番をしているのだ。冬の夜ともなれば
黄金はぶあつい鱗を通して わしの腹を凍てつかせる。
ギザギザの王冠や、ねじれた指輪は、冷酷にも
ごつごつした冷たいわしのしとねなのだ。

つれあいを食ってしまわねばよかったものを、としばしば思う。
とはいえ、竜は竜を食らわねば一人前にはなれぬのだ。
あいつがいてくれれば、宝物はずっと安全だったものを。
あれが見張りについてくれたときは、ときおり
疲れた体を伸ばして、浅い眠りにつくことができたものだ。

夕べ、月の入り時分に、キツネがケーンと鳴いて
目が覚めてしまった。それで眠っていたことに気がついたのだ。
岩地を飛ぶフクロウが、よく
ひやりとさせる。それで眠っていたにちがいないと思うのだ。
ほんの瞬きのあいだだけれど。その一瞬間に
わしの宝を盗もうと、人間がこっそり
町からやって来たやも知れぬのだ。

人間どもは町でわしの宝物を横取りする算段をしておる。
小声でわしのことを噂し、計画をたてるのだ。
情け知らずの人間どもめが。椅子にはビールが、
臥所には暖かいつれあいが、歌ってくれるので
一晩中ぐっすり眠られるのじゃないか。
わしはというと、冬に一度だけ岩屋を出て、

岩場の池で水を飲むだけだ。夏は二回だけだ。

人間どもは、この年老いた、哀れな竜に少しの情けもかけてはくれぬ。

ああ 神よ、竜を造られた主よ。平安をください。

でも宝をあきらめよとはおっしゃいますな。

よそへ行けとか、死ねとか言われますな。他のものどもが宝を奪いますからな。

それよりむしろ、主よ、人間どもやほかの竜を

殺してください。そうすれば

少しは眠り、水を飲みに出て行けますから。

(『天路退行』、第10書、8章、訳は筆者)

もう一つの詩はヴァーチャーが南の竜と戦った後で歌われる。

勝利をたずさえて戻ってきたぞ。

ああ 近寄らないで—ほくにふれてはいけない。

服のままでもだ。僕は真っ赤に燃えているのだから。

あいつはむごい奴だった。僕の楯が

藪のそばで光るのを見たとき

黄金のあぎとから パツと炎を吐き出したのだ。

吐き出した炎がほくの剣にふれると

刃が火に包まれた。柄の宝玉が

割れて、箔が熱く溶けだした。

あいつの口から吹き出す熱い息で

剣も、剣を持つ腕も炎に包まれたとき、

ほくはあいつを打っておとなしくさせた。

みずからの反吐のなかで、竜は死んだ。

ほくは奴をひっくり返し、大きく引き裂いて

たぎるような熱い脇から、心臓を掴みだした。

その心臓に歯を当てると、
ほくの内では脈がドキドキと打ち始めるのがわかった。
まるで胸が張り裂けそうだった。

丘を揺るがし、よろめかせ、
糸車のように森を巻き取った。
ほくが足を踏みしめた所は 草が焼けこげた。

ベヘモトは ほくのしもべ
飼い慣らされたレヴィアタンに乗る
大勢の牧神の前で
声高らかに ほくは歌う。ほくには出来るのだから。
再びほくは立ち上がろう。そして歌おう
勝利の歌を。

もう分かったぞ。ほくが賭けていたものが
もう知っているぞ。竜がなぜ存在するのかを。

(『天路退行』10書, 9章, 訳は筆者)

ルイスは『天路退行』をバニヤンの『天路歷程』になぞらえて、アレゴリー形式で書いた。この物語では特に方位や地勢にアレゴリー的な意味を持たせている。北は厳格で原則主義。南は感情が全てに優先するような考え方を示している。主人公ジョンは南方の性格を付与されており、彼の人生という旅の出発点は、甘美な憧れの追求である。一方ヴァーチューは理想とルールを遵守するという北方の性格を代表している。ルイスによれば、北も南も共にバランスを欠き、重要なのは中庸を表す大道(main road)を歩むことである。ジョンとヴァーチューは途中袂を分かたが、単独では極端な方向に踏み迷ってしまう。再び合流し、二人は大道に進むことが出来るのである。二人の道中記はジョンが北のドラゴンを、ヴァーチューが南のドラゴンを退治してはじめて完結する。つまり、北のドラゴンは、孤独で、たとえ世界でただ一人になっても自分のプライドや欲を捨てようとはし

ないエゴイストを体現している。一方、南のドラゴンは、その熱さで全てを溶かしてしまうような情熱を体現している。『ニーベルングンの指輪』にもあるように、竜を退治したものは竜の持つ力を受け継ぐことが出来る。ジョンは北のドラゴンを殺すことでその特徴をいささか身に帯びることが出来、同時に北のドラゴンが持つ冷酷さや怯えを捨て去ることにもなる。また、ヴァーチャーは情熱を欠いていたため、南のドラゴンを退治し、その熱をもらうことができたのである。彼はストイックな生き方をしてきた。肉体は魂の牢獄であるというような、喜びや恍惚といった感覚を避けてきたのだが、南のドラゴンを殺し、その心臓を食べることで、魂と肉体の合体に成功する。『天路退行』においてドラゴンの存在理由として、竜は制御することは難しいが、克服することによって全人格に統合される人間の姿の記号である。ここでは竜は必ずしも悪のアレゴリーではない。

『ペレランドラ』

ドラゴンが登場する二番目の作品は『ペレランドラ』(*Perelandra*, 1943)である。これはランサム三部作の二番目の作品である。一作目の『沈黙の惑星を離れて』(*Out of the Silent Planet*, 1938)において主人公ランサムは、それぞれの惑星は死んだ星ではなく、オヤルサと呼ばれる守護神に統治されていることを学ぶ。また、地球以外の星で通用する言語(天地創造時の言葉で、バベルの塔の事件以後地球では失われてしまった言語)を習得する。地球に戻ってから、しばらくしてランサムはオヤルサの命を受けて金星に旅する。そこは固定した土地ではなく海中に浮かぶ島で構成されていた。浮島にはい上がったランサムが最初に遭遇する動物がドラゴンなのである。言葉は解さないようであるが人見知りをしないドラゴンをランサムは友と呼ぶ。そして、このドラゴンのいる所には感動的なほど美味しい果物が実っている。ランサムは前回の旅(火星への旅)で、地球における神話は別世界では現実ではないかと思っていたので、今回もこの初めての土地でのドラゴンを、ギリシャ神話に出てくるヘスペリデスのドラゴンに似た存在として認識する。

彼が目を開けると、見たこともないような鮮やかな色彩に彩られた木が見えた。黄色い果実がたわわに実り、銀色の葉がそよいでいる。群青色の幹の根本をぐるりと巻くようにして、一匹の小さなドラゴンがいた。赤銅色の鱗に覆われた生き物だった。彼はたちまちヘスペリデスの園だと思った。⁴⁾

これは確かに神話的な光景である。しかし、墮落を経験しない金星では、ドラゴンすら無垢である。退治すべき存在ではなく、親交を結ぶべき存在として描かれている。『ペレランドラ』においてルイスが描いた世界は、アダムとイブが罪を犯さなかったら、こうであったであろうという仮定の世界である。その世界では、いっさいの被造物は悪を知らないとルイスは考える。ランサムは火星でもギリシャ神話に出てくる想像上の生き物とそっくりな生物に出会っていた。今度はドラゴンである。そこで彼は次のように考えるのである。

今思えば、寒々とした古びた世界、マラカンドラと呼ばれる別の世界において、彼は洞窟に住む巨人で羊飼ひ、キュクロプスの原型のようなものと出会ったことを思い出した。地球上で神話と思われるもの全ては別世界では現実のものとして存在するのではないだろうか？⁵⁾

ルイスはしばしばプラトンのイデア論に言及するが、人間が考え得るものは我々の世界では見あたらないにしても、どこかにすべて実在するのではないかと考えているようである。少なくとも、彼のファンタジーの中ではそれをベースにして描いた場面が多々ある。人の原罪のせいで動物が人間に対し全てが従順ではなくなった。ドラゴンも猛々しく、人間に敵対するものとされているとみなされている。『ペレランドラ』では、ルイスはドラゴンにアレゴリカルなニュアンスを与えていない。なぜならこの三部作においては、地球上で人間が創り上げた全ての想像上の生き物は、別世界では実在するからである。『奇跡論』においてルイスは「神話一般は(エウヘメロスが思ったように)単に誤解された歴史でも、(教父のあるものが考えたように)悪魔的な幻想でもなく、また(啓蒙主義の思想家が考えたように)聖職者の嘘でもなく、最上の神話は、焦点がぼやけているにしても人間の想像力の上に落ちた神の真理の微かな光である、という信念を含んでいる」⁶⁾と述べている。神が与えた物語が罪ある人間の想像力の中でゆがめられるように、別世界では無害な生き物が地球上では怪物になるとルイスは言おうとしている。

…火星に於いて、いや、火星においてだけでなく、ここにきてからもずっと、自分は真理と神話の違い、またその両者の、事実との違い、という三重の相違がまったく地球的なものであって、墮罪の結果である霊肉との不幸な

乖離の一結果だということを強く感じていた。⁷⁾

『朝びらき丸 東の海へ』

この物語では、ルイスはキリスト教的倫理を教育するためのものとしてドラゴンを使用している。意地悪く、自分の都合の悪いことには目をつぶるようなユースティスが遭遇するのがドラゴンである。自己中心的な少年が否定的な存在に出会うというパターンは、『ライオンと魔女』ですでに採用されている。ひねくれもののエドモンドが、ナルニアで初めて出会うのが魔女であった。つまり、否定的な出会いは、本人の潜在的な罪が呼び寄せるという考え方である。これは新約聖書ヤコブの手紙にある「人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑される」という言葉をふまえていると思われる。しかし、ユースティスのケースで興味深いのは、遭遇したとき、そのドラゴンは死に瀕しており、池に水を飲みに来て、ユースティスの目の前で息絶えることである。ユースティス少年は、雨宿りのため竜の洞穴に入り眠ってしまう。気がつくとその穴にはもう一頭の竜がいるらしい。結局その竜は眠っている間に変身したユースティス自身であることがすぐ判明するのだが、ここで、ルイスは心が竜のよう (dragonish thoughts in his heart) だから、外側も竜になってしまったと語っている。竜のような心とは、自己中心で欲深く、自己矛盾に陥りながらもそれを認めないで、他者の責任に転嫁するような性格のことである。すぐさま連想されるのが、『天路退行』でジョンが対峙した北のドラゴンの独り言であろう。この詩にあるように、ドラゴンは必ず一頭しかない。それはドラゴンが他のドラゴンを食べてしまうからである。ユースティスの見たドラゴンも残った一頭であった。水を飲みに出てきて、そのまま息絶えた、年老いたドラゴンは、『天路退行』のあの北のドラゴンのなれの果てとあってよい。彼もおそらく宝物の見張りのため、めったに水を飲みにも出れず、ついに死んでしまったのだろう。欲のために、自らを失う存在である。ユースティスはそのドラゴンを退治せず、逆に自分もドラゴンになってしまう。死んだドラゴンはカスピアン達が探し求めていた七人の貴族の一人であった。彼もまた、ドラゴンの宝を見て欲にかられ、竜の心を抱いたためドラゴンになり果てたのであろう。ユースティスの場合はかえってドラゴンになったため、それまでの自己の歪な性格を反省することができた。それは、うるさがってはいたが、いざというときに気にかけて

くれる仲間がいたためであり、最終的には救い出してくれるアスランの存在があったからである。ユースティスのドラゴン騒動は、「人は、たとい全世界を手に入れても、まことの命を損じたら、何の得があろう」(マタイ16:26)というキリストの戒めを示唆している。物語がフェアリー・テイルであるため、邪悪と言うよりはむしろ同情的に語られ、どの人間にも潜在的にあるエゴイストの記号として機能している。皮肉なことに、ドラゴンになったユースティスは人間であったときより仲間に愛され、飛ぶことができるという能力を駆使して、人助けすら出来るようになる。ドラゴン・ユースティスは、他のフェアリー・テイルのように、子どもの友となるドラゴンであり、ネズビット風の飼い慣らされたドラゴンのグループに属するのである。このため、ユースティスのドラゴンは、説教臭さから解放され、楽しい愛すべきドラゴンとして、フェアリー・テイルの中で忘れられない位置を占めることができるのである。この背景には、ルイスのドラゴン好きが無視できないと思われる。おそらく、ルイスにとっては、ドラゴンというのは聖書に登場する赤い竜のサタンではなく、ギリシャ神話やその他のロマンスに登場する竜のイメージの方が濃厚であったのではないだろうか。

『銀のいす』

この物語では緑の魔女が悪のキャラクターとして登場する。『魔術師の甥』や『ライオンと魔女』に登場する白魔女ジェイデイスはギリシャ神話のキルケやゴルゴンなどの系列に入る。ジェイデイスは敵の目をくらますために石になったり姿を変えることができるが、人間に似た魔女のすがたが本来の形である。一方緑の魔女は元の姿が蛇である。リリアン王子の母を殺した毒蛇として描かれているが、物語のクライマックスで王子に退治される魔女は単純な蛇とは思えない。ポーリーン・ベインズの挿し絵によると、とさか状のものが頭についており、竜とみなすこともできる。挿し絵はルイスがすべて目を通してはすないので、ルイスがそのように注文したという可能性は大いにある。とすれば、この蛇は竜でもありうる。原文ではsnakeという単語は1回しか使われておらず、(great) serpent, worm, creatureといった語が使われている。Serpentもwormも竜を指すことがあり、どちらも解釈できる語り方をしている。ただし、これらの単語は竜を指すにしても、どちらかと

いうと足のない竜をさすようである。おおざっぱに言って、worm系の竜は蛇に近く、翼や足がない。一方ドラゴン系の竜は有翼で有足(2本にしる4本にしる)のものを言うようである。ドラゴン系はワニとの関連も強いのである。とはいえ、ルイスがsnakeと言う語を使用している限り、緑の魔女は蛇であり、イブをそそのかした蛇との連想が強いことも確かである。一方、イザヤ書27章では、蛇レ비아タンを竜とも呼んでいる。中世の図像では、レ비아タンは竜として描かれている。また、黙示録12章にも、「巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇」と記されているとおり、蛇と竜は同一視されている。他の国々における神話にも蛇と竜の区別があいまいなように、『銀のいす』では蛇も竜もほとんど同義語として考えられているのかも知れない。『銀のいす』は『さいごの戦い』と同様、『ライオンと魔女』や『朝びらき丸 東の海へ』にあるようなユーモアがほとんどみあたらない。丸い石に変身する少々滑稽なところや、「世界と世界の間の森」のなかで無気力になってしまうようなところがジェイデイスにはあったが、緑の魔女には滑稽なところが皆無である。したがって竜は悪の化身である緑の毒蛇により近づいてしまったのだろう。ルイスにおいては、イブを誘惑する蛇と、騎士(ここではリリアン)によって退治される竜とがダブルイメージとしてあったのではないだろうか。リリアン王子はこの怪物を殺すことで母の復讐を遂げ、王としての一步を踏み出すことになる。そういった点で、クライマックスでは単なる蛇より、竜の姿がふさわしい。伝統的な竜vs騎士の構図ができあがるからである。

以上ルイスはドラゴンまたは蛇を彼のファンタジーやフェアリー・テイルに登場させたが、作品によってその描き方はさまざまである。キリスト教の伝統にしたがって、竜を邪悪なものの総括としてとらえることもあるが、おおむね、彼の描くドラゴンはギリシャ神話の「凝視するもの」である。ステンドグラスや日曜学校風ではなく、想像世界のなかに聖書のエピソードが投げ入れられれば、人は心を解放してそのエピソードの意味を感じることができるのではないか—それがルイスのファンタジーによせた思いだった。彼は、それを“past watchful dragons”⁸⁾と表現している。用心深くわれわれを監視する竜とは、言い得て妙である。心の隙間に入り込んでわれわれをたぶらかす怪物にもなるが、われわれがうまくすり抜ければドラゴンのもつ豊穡さと

力を得ることもできるのである。

注

- 1) C.S. Lewis, "The Alliterative Metre", *Rehabilitations and (Other Essays)* Oxford Univ. Press, 1939), p.122.
- 2) 世界大百科事典「竜」(平凡社デジタル版, 1998).
- 3) 荒俣宏, 『怪物の友』(集英社, 1994) p.259.
- 4) Lewis, *Perelandra* (The Bodley Head, 1997), p.49.
- 5) *Loc. Cit.*
- 6) Lewis, *Miracles* (Touchstone, 1996) p.176.
- 7) do., *Perelandra*, p.163.
- 8) Lewis, "Fairy Stories", *of Other Worlds* (Harcourt Brace Jovanovich: NY, 1975), p.37.

参考文献

- 荒俣宏, 『怪物の友』(集英社, 1994)
荒川紘, 『竜の起源』(紀伊国屋書店, 1998)
苑崎透 『幻獣ドラゴン』(新紀元社, 1996)
竹原威滋 他編 『世界の竜の話』(三弥井書店, 1998)
Green, Roger Lancelyn, ed. *A Book of Dragons* (Penguin Books, 1970)
Le Guin, Ursula, *The Earthsea Quartet* (Puffin Books, 1993)
Lewis, C. S., *Miracles* (Touchstone: NY, 1996)
do. *Perelandra* (The Bodley Head, 1977)
do. *The Pilgrim's Regress* (Eerdmans, 1981)
do. *The Silver Chair* (Macmillan, 1988)
do. *The Voyage of the Dawn Treader* (Macmillan, 1988)
Nesbit, Edith, *The Last of the Dragons and Some Others* (Puffin Books, 1988)
Jeffrey, David Lyle, ed. *A Dictionary of Biblical Tradition in English Literature* (Eerdmans, 1992)
デ・ヴォラギネ, ヤコブス, 『黄金伝説』前田敬作 他訳 (人文書院, 1979)
平凡社世界大百科事典(デジタル版)